



UTCMES ニュースレター

VOL.5 2014

1. 安倍首相のオマーン国訪問	1	5. 学生たちによるサウジアラビア体験報告記	8
2. 映画上映会：ドキュメンタリー映画から知る「アラブの春」開催報告	2	6. 書評	10
3. UTCMES 中東イスラーム世界セミナー実施報告	3	7. センターの活動から	11
4. UTCMES 定例研究会開催報告	6	発行者情報	12

1. 安倍首相のオマーン国訪問

東京大学中東地域研究センターの下にあるスルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座は、オマーン国からの寄付金によって運営されています。新年を迎えて間もない2014年の1月9日から10日の二日間、安倍晋三内閣総理大臣が、このオマーン国を訪問しました。現職の日本の首相の現地訪問は、1990年の海部俊樹首相の訪問以来、24年ぶりのことです。現役の首相の訪問ということもあり、現地の関心も極めて高く、現地紙に

は、訪問中はもちろんのこと、訪問の前後にも、安倍首相の動向や日本に関連する多くの記事が掲載されました。

カブース国王と安倍首相との首脳会談後には、両国の共同声明が発出されました。共同声明は1. 政治・安全保障分野における協力、2. 経済分野における協力、3. 教育・文化分野における協力、そして4. 地域および国際社会の課題という四つの柱から構成されています。このうち、教育・文化分野における協力に関

する箇所には、カブース国王と安倍首相が、東京大学中東地域研究センターにあるスルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座の設立を通じて達成された学術的貢献を高く評価したこと、また2014年10月に東京で開催されるスルタン・カブース講座の国際シンポジウムに期待しつつ、そのような取組みが日本国における中東地域研究を更に促進することへの期待を表明したことが明記されています。

現在UTCMESは、この共同声明で言及されたシンポジウムが成功のうちに終わるように、各方面の関係部署と協力して準備を進めています。世界のカブース講座の担当教員はもちろんのこと、学術分野だけではなく、幅広い分野からの出席者を迎え、中東地域研究の促進そして人類の知の蓄積に貢献できるようなプログラムを検討中です。ご期待ください。

なお、共同声明の全文は、日本国外務省のホームページから閲覧・ダウンロードすることができます (http://www.mofa.go.jp/mofaj/me_a/me2/om/page24_000186.html)。

(執筆：近藤洋平)



(カブース国王と安倍首相の会談の様子を伝える2014年1月10日付現地紙)

2. 映画上映会：ドキュメンタリー映画から知る「アラブの春」開催報告

2013年10月17日および18日、東京大学中東地域研究センターでは、山形国際ドキュメンタリー映画祭のご協力のもと、各監督によるトークセッションをまじえた、映画上映会「ドキュメンタリー映画から知る『アラブの春』」を開催しました。映画上映会では、「山形国際ドキュメンタリー映画祭」に出品された「アラブの春」に関する作品のうち『良いはずだった明日』と『気乗りのしない革命家』の二作品を上映しました。

初日に上映した『良いはずだった明日』は、革命の混乱のなかにあるチュニジアを描いた映画です。喧噪の路上で監督が出会った女性アイダは、離婚し、障害者の息子を連れて路上をさまよいながら、次々と空き家を見つけては強引に住み着き、問題を起こします。映画は、貧困のなかで日々の糧にも窮する彼女が、それでも遅く生き抜く姿を追っています。革命に熱狂する民衆の裏で、社会から疎外されてきた女性の目に映った現実の姿を浮かび上がらせる力強い作品でした。

第二日目に上映した『気乗りのしない革命家』は、「アラブの春」をカメラに収めようとイエメンへ向かった監督が、案内役で観光業者のカイスを追っています。反政府デモによりビジネスに打撃を受けたカイスは、日々の苦しい暮らしに追われ、出産を控えた妻ともぎくしゃくしてしまいます。当初、カイスはデモには懐疑的でしたが、政府によるデモ隊への発砲と死傷者を目撃することで、その様子が徐々に変化していく様子が丁寧に描かれた作品でした。

(執筆：辻上奈美江)



(上映後に登壇し、質疑に回答するヒンド・ブージャーマア監督)



(上映後の質疑に答えるショーン・マカリスト監督。左は、二日間通訳を担当した本学学生の伊藤早悠里さん)

3. UTCMES 中東イスラーム世界セミナー実施報告

東京大学中東地域研究センター(UTCMS)は、2012年度から中東イスラーム世界セミナーを開催しています。このセミナーシリーズは、中東イスラーム世界について、幅広く、また深く掘り下げて探求する趣旨を持った公開講座です。中東・北アフリカ地域のみならず、南アジア、東南アジアなどイスラーム世界全体に視野を広げて、特定のテーマについて、多角的な視点から考察することを目的としています。

2013年度は、「中東の思想と社会を読み解く」というテーマのもと、主として中東・北アフリカ地域における社会・文化・思想の多様性およびその特質を、全11回の講義から明らかにしました。このうち第6回から第11回の計6回を、2013年10月から2014年2月にかけて実施しました。以下、各回の概要を報告します。

なお、一連のセミナーの成果は、論集として2014年に出版する予定です。

●第6回「12イマーム・シーア派のハディース観」

日時：2013年10月12日

14:00-15:30

場所：駒場キャンパス18号館4階
コラボレーションルーム3

講師：吉田京子

(神田外語大学外国語学部専任講師)

2013年10月12日(土)、UTCMSは中東イスラーム世界セミナー「中東の思想と社会を読み解く」の第6回「12イマーム・シーア派のハディース観」を開催しました。はじめに吉田京子講師は、シーア派においてハディース(伝承)とは第一義的に「イ

マームの言行録」として認識されていること、ハディースそのものが救済の要、救済の必須条件とみなされ、重視されてきたことなど、スンナ派とは異なるシーア派のハディース観について説明しました。続いて吉田講師は、シーア派の多数派である12イマーム・シーア派のハディース観のうち、イマーム(シーア派共同体の指導者)は必ず先代による明確な指名を受けている、というナツス理論、またイマームは「清められた者」でありあらゆる誤謬から免れているとする不可謬性の理論について説明しました。そしてイマームの伝承としてのハディースの利点に言及した後、西暦10世紀の学者クライニーによって編纂され、高い評価を受けている『充全の書』の構成やその特徴について解説しつつ、現在シーア派のハディース集が活発にアラビア語から他言語に翻訳され、広く愛読されていることに触れました。



●第7回「シーア派思想史と極端派(グラート)」

日時：2013年10月19日

15:30-17:00

場所：駒場キャンパス18号館4階
コラボレーションルーム3

講師：菊地達也

(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)

2013年10月19日(土)、UTCMSは中東イスラーム世界セミナー「中東の思想と社会を読み解く」の第7回「シーア派思想史と極端派(グラート)」を開催しました。はじめに菊地達也講師は、グラート(極端派)に関する先行研究の説明を引用しつつ、極端派を規定するのは基本的に分派学者であること、基本となる教義は特定個人の神格化にあること、そしてシーア派の中で思想の極端さゆえに排除された人びとがその源流であることなど、グラートとして語られる集団がもつ共通項を提示しました。続いて菊地講師は、8世紀に活動したハッターブ派やホッラム派の主張を紹介しつつ、西暦7世紀からの極端派の形成を説明しました。そして現在も存続するドゥルーズ派とアラウィー派について、菊地講師は、輪廻転生をはじめとする両派の特徴的な思想、自己防衛のための信仰隠しや土着の民俗との混淆などの両派の共通点、また相違点を解説しました。講義の最後では、こうした極端派に対する多数派の姿勢として、イブン・タミーヤ(1326年没)によるドゥルーズ派ほか諸派の法学上の位置づけ、また現代イスラーム世界における事例が報告されました。



●第8回「東方イバード派における罪概念の展開」

日時：2013年11月2日

15:30-17:00

場所：駒場キャンパス 18号館 4階
コラボレーションルーム 3

講師：近藤洋平

(東京大学大学院総合文化研究科特任助教)



2013年11月2日(土)、UTCMSは中東イスラーム世界セミナー「中東の思想と社会を読み解く」の第8回「東方イバード派における罪概念の展開」を開催しました。報告を担当した当センターの近藤が、はじめにイバード派の歴史、現在の状況について概説しました。続いて、宗教集団の特質を究明するために宗教社会学の分野で提示されてきた理論や成果を紹介しつつ、その中から、集団内の構成員による逸脱に対して、東方イバード派がどのように対応していたのかという問題を、同派における罪の理解、また「関わりを絶つこと」を意味するバラアア(Baraa)の宣告の実態というふたつの点から説明していきました。東方イバード派における罪の理解について、報告者は、イスラーム世界における実践に従って、同派では罪が大罪を軸にして分類されていたこと、学者たちは罪に対して厳しい態度をとっていたことを説明しました。他方、大罪者にはバラアアが宣告されるという点について、報告者は、バラアアの宣告は慎重に行われていたこと、また悔悟を求めることを通じて、大罪を犯した構成員がイバード派共同体にとどまることができるようにする仕組みを整えていたことなどを論じました。

●第9回「東地中海世界における終末思想の展開」

日時：2013年11月30日

15:30-17:00

場所：駒場キャンパス 18号館 4階
コラボレーションルーム 3

講師：辻明日香

(日本学術振興会特別研究員(PD) / 東京大学東洋文化研究所)

2013年11月30日(土)、UTCMSは中東イスラーム世界セミナー「中東の思想と社会を読み解く」の第9回「東地中海世界における終末思想の展開」を開催しました。はじめに、辻明日香講師は、中世と呼ばれる時代における、終末思想の影響の問題について説明しました。そして辻講師は、講義の目的である伝統の継承と変容、また共有されたイメージを、『偽シユヌダーの黙示録(2)』に至る、東方キリスト教世界における黙示録の検討から、また各黙示録に書かれたイスラーム政権像から検討しました。イスラーム政権以前からマムルーク朝期に至るまでの諸黙示録における、ダニエル書第7章1-28節の「四頭の獣の幻」の解釈などを丁寧に紹介しつつ、辻講師は、アラビア語コプト黙示録は、忍耐を呼びかけるコプト語黙示録ながら、シリア系の「歴史的」黙示録の影響が大きいこと、また『偽シユヌダーの

黙示録(2)』にみられる「19人にイスラームの王」のモチーフは、シリア系の「歴史的」黙示録に特徴的な歴史叙述への関心がアッバース朝あるいはファティマ朝期にエジプトに伝播し、コプト黙示録の要素になった可能性などを指摘しました。



●第10回「イスラーム哲学の転換点：イブン・スィーナーをめぐる比較思想の試み」

日時：2013年12月21日

15:30-18:00

場所：駒場キャンパス 18号館 1階
メディアラボ 2

講師：小林春夫

(東京学芸大学人文社会科学系教授)

仁子寿春

(京都大学非常勤講師)

高橋英海 (東京大学大学院総合文化研究科准教授)

共催：科学研究費 基盤研究(c)

「イブン・スィーナー『治癒の書』に関する比較思想史的研究(2)」

2013年12月21日(土)、UTCMSは中東イスラーム世界セミナー「中東の思想と社会を読み解く」の第10回「イスラーム哲学の転換点：イブン・スィーナーをめぐる比較思想の試み」を開催しました。セミナーの司会も担当した小林春夫講師は、全体の導入において、イスラーム哲学とは

何かを概説するとともに、最近のイスラーム哲学の研究動向を紹介しました。また「イブン・スィーナーからスフラワルディーへ」と題する講義において、小林講師は、イブン・スィーナー(980-1037)における「自己」の発見を解説した後、スフラワルディー(1155-1191)における「光」の概念を考察し、スフラワルディーによる「照明哲学」のコスモロジーの基底には、イブン・スィーナーにおける「自己」が継承されていると論じました。



仁子寿晴講師は、「キンディーからイブン・スィーナーへ至る『イスラーム哲学』の系譜」と題する講義の中で、イブン・スィーナー時代以前の哲学者として紹介される人びとの活動を、アッバース朝における翻訳活動との関係から論じました。仁子講師は、天文学や医学などの自然科学と哲学伝統な密接な関わりがあり、当時の「哲学」の目的の一つには、翻訳文化を含めた当時の自然科学に対応することがあったことを説明しました。そして翻訳活動を黎明期／全盛期／編集・改稿期の三つに時代区分し、各区分における代表的人物の業績を紹介しました。またあわせて、同時代のイスラーム神学の分野における哲学的思惟の動向を解説しました。



高橋英海講師は、「イブン・スィーナーからバルヘブラエウス」という講義の中で、13世紀のシリア・キリスト教世界で活動したバルヘブラエウス(1225/6-1286)を取り上げました。アリストテレスの『気象学』のシリア語・アラビア語の伝承経路を例として、高橋講師は、キリスト教徒であるバルヘブラエウスが、宗教の異なるイブン・スィーナーの著作にアクセスできる世界で活動していたことを明らかにしました。同様に、バルヘブラエウスの著作と、イスラーム世界の思想家ガザリー(1111年没)の著作との比較から、バルヘブラエウスは、ムスリム世界の思想や著作を利用していたことを説明しました。



なお、本セミナーは科学研究費・基盤研究(c)「イブン・スィーナー『治癒の書』に関する比較思想史的研究(2)」と共催で行われました。

●第11回「ムスリム王朝支配下のエジプトにおけるキリスト教徒の参詣・巡礼」

日時：2014年2月1日

15:30-17:00

場所：駒場キャンパス 18号館 1階
メディアラボ 2

講師：大穂哲也

(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)

2014年2月1日(土)、UTCMSは中東イスラーム世界セミナー「中東の思想と社会を読み解く」の最終回「ムスリム王朝支配下のエジプトにおけるキリスト教徒の参詣・巡礼」を開催しました。大穂哲也講師は、講義の内容を(1)戦中期の日本における研究の嚆矢、(2)10～15世紀のエジプトのキリスト教徒による巡礼・参詣の具体例、(3)現地の最新状況の三部に分けて説明しました。(1)において、大穂講師は、戦中という時局の影響を受けつつも、古代エジプト研究やコプト学の分野で精力的な研究・執筆活動を展開した、岡島誠太郎(1895-1948)の業績を紹介しました。続く(2)において、大穂講師は、エジプトにおけるキリスト教徒の巡礼・参詣を研究するねらいやその意義、また研究方法について論じるとともに、10～15世紀における巡礼・参詣の具体的な様子を、アブー・マカーリム(Abū al-Makārim)の参詣指南書などから明らかにしました。そして(3)では、2011年以降のコプト教徒の動向や、2013年12月のエジプト国内のコプト教会の状況が、豊富な画像資料とともに紹介されました。



(執筆：近藤洋平)

4. UTCMES 定例研究会開催報告

昨年度に引き続き、UTCMESは、内外の新進気鋭の研究者を招いて、活発な議論を行い、もって中東地域に関する研究の一層の発展を目指すことを目的とする、定例研究会を開催しています。研究会は、ロシアや中東欧、また南アジアや中央アジアなど、隣接領域の研究者との交流を積極的に図ることも目標の一つに置いています。

●第9回定例研究会

「19-20世紀スイスにおける絨毯交易—マイヤー・ミュッラー商社(1890-1990)を事例として—」
日 時：2013年11月16日(土) 15:30-17:00
報告者：田熊友加里
(日本女子大学学術研究員)
コメンテーター：杉村棟
(国立民族学博物館名誉教授)
会 場：駒場キャンパス18号館4階 コラボレーションルーム2

報告要旨

本報告では、報告者が現在執筆中である博士論文「『ペルシア絨毯』をめぐるオリエント・イメージの伝播と変容—19~20世紀中東地域からドイツ語文化圏へ」(仮)の中間報告を中心におこなった。博士論文においては、東西文化交流の立場から、「絨毯研究」の発祥の地である19世紀後半から20世紀中葉のドイツ語文化圏(現在のドイツ・オーストリア・スイスを対象地域とする)におけるオリエント産絨毯の流行と収集活動を事例に、「ペルシア絨毯」というモノが表象するイメージの変遷と伝播が、同時代のオリエント学、文学、芸術、マス・メディア等に及ぼした影響を分析している。

現存する18世紀以前に製作されたアンティーク絨毯の大部分は、転売を重ねた結果、その製作地や本来の所有者(購入者)・流通経路に不明な点が多い。絨毯売買をめぐる市場ネットワークを究明するためには、ガーજャール朝イランやオスマン帝国をはじめとする絨毯製作地域と、欧米を中心とする受容地の双方の資料を照らし合わせる必要がある。また、曖昧な「ペルシア絨毯」の定義と、実際に収集された絨毯の製作地との間に生じた齟齬は、当然ながら、当時のドイツ人が抱いたオリエントに対する認識にも大きな影響を及ぼしていたと考えら

れ、この相違こそが当時のオリエントをめぐる地理学的・歴史学的な認識をより正確に捉えるための重要なキーポイントであると言える。

そこで本報告では、ヨーロツパ側の史料として、マイヤー・ミュッラー商社(Teppichhause Meyer-Müller & Co.)に焦点を当て、ドイツ語文化圏とガーજャール朝イラン・オスマン帝国を結ぶ絨毯の主要な流通経路を探る手がかりとした。1890年にカール・マイヤー・ミュッラー(Carl Meyer-Müller 1849-1918)によって設立されたミュッラー商社は、スイス・チューリヒを拠点にベルン、ジュネーヴ、パリ、ロンドンの各地に支店を展開させながら、オリエント産絨毯を欧米市場で取引して巨額の財を築いた。しかし、1990年の倒産を機に、同社のミュッラー・コレクションの大部分が転売処分され、その詳細は未だ正確に把握されていない。

ミュッラー商社に関する文献資料は3冊①Der Orientteppich in Geschichte Kunstgewerbe und Handel. (1917年) ②Meisterwerke Altpersischer Teppichknüpferei von Carl Meyer-Müller. (1921年) ③Meyer-Müller & Co. A. G. 100 Jahre Teppiche aus dem Orient. (1970年)のみ確認でき、いずれの文献も同社の設立史と、カラー写真を含む絨毯目録の二部構成である。ミュッラー・コレクションは、精巧なオリエント産絨毯を近代ヨーロツパの技術で複製し、販売するためのサンプルとして収集された。ヨーロツパにおけるオリエント産絨毯を複製する試みは、古くは11世紀頃より連綿と続けられてきたが、ミュッラー・コレクション形成の背景には、近代以降のウィーン万国博覧会(1873年)、東洋絨毯博覧会(ウィーン、1891年)、ムハンマド美術大展覧会(ミュンヘン、1910年)を経て、新興の中産階級を中心とする絨毯需要の急増が大きく影響を与えたといえよう。

本報告では、上記の資料を基に、次の3点について明らかにした。

①20世紀前半における「ペルシア絨毯」の交易状況

目録に記載された在仏ペルシア公使館記録(1913年3月21日~1914年3月20日)より、羊毛製絨毯と絹製絨毯の輸出先としてロシアが過半数を占めている点から、従来のロンドン市場やイスタン

ブル市場に次ぐ、東欧を中心とする第3の絨毯市場が存在していた可能性を指摘した。

②ミュッラー・コレクションの特徴にみる「ペルシア絨毯」の捉え方

絨毯目録より、絨毯164点の製作地域・年代について統計を取った結果、中央アジア産絨毯とコーカサス産絨毯が全体の過半数を占めており、また「ペルシア絨毯」に分類された製作地が広範囲にわたり他の製作地と重複していた点が明らかになった。報告者は地理上の絨毯製作地よりも、むしろ絨毯の織り技術(いわゆる「ペルシア結び」または「トルコ結び」)を基準に判断したと推測する方が理に合うと結論づけた。

③ミュッラー商社とガーજャール朝イランの親交

2代目経営者のカール・ゲオルグ・マイヤー・ピュンター(Carl George Meyer-Pünter)は、1904年に絨毯買付けのために中東現地を訪れた。彼は1917年からペルシア領事に、1921年からは同総領事を歴任しており、当時のドイツとガーજャール朝イランを結ぶ親交の代表的人物であったと推測できる。今後の課題として、ミュッラー商社の記録とペルシア領事時代のペルシア語史料を照合させながら、絨毯交易における彼の動向を分析する必要性を挙げた。

以上の研究報告に対して、コメンテーターの杉村棟先生より、国立民族学博物館(大阪府吹田市、以下みんぱくと略す)が、1980~90年代初頭にかけてミュッラー商社から購入した絨毯コレクションを所蔵しているとの情報をご教示頂いた。ミュッラー商社の絨毯は本国スイスにおいても僅少であり、日本国内でその所在を確認できたことは大きな進展である。後日談となるが、杉村先生のご紹介により、2014年1月上旬にみんぱくの保管庫にて貴重な絨毯コレクション9点(絨毯のほか、壁掛けや鞍掛け等の加工品を含む)を実地調査させて頂くことができた。本研究会を通じて貴重な研究調査の機会に恵まれたと思う。杉村先生、そして本研究会関係者の方に厚く御礼申し上げます。

(執筆：田熊友加里)



●第10回定例研究会

「第一次世界大戦直前のオデッサ：ウラジオストクとの比較」
日 時：2013年12月7日(土) 15:30-17:00
報告者：左近幸村
(新潟大学超域学術院准教授)
会 場：駒場キャンパス18号館4階 コラボレーションルーム2

報告要旨

本報告は、自由港制の問題に着目しつつ、第一次世界大戦直前のオデッサをウラジオストクと比較することにより、今後の環黒海地域と環日本海地域の比較研究の見取り図を示そうとしたものである。こうした比較の試みに関連する先行研究としては、たとえば国内外で出ているオスマン帝国と清帝国の比較論などが挙げられる。あるいはバルカン史研究の泰斗柴宜弘も、バルカン史と東アジア史を比較することの意義を説いている(柴宜弘「(コラム)歴史の風」地域史から考えること『史学雑誌』117編1号、2008年)。本報告はこれらの流れを踏まえ、それをロシア史にも応用してロシア帝国の東西比較を試みた。

本報告が指摘した、オデッサとウラジオストクの共通点は以下の通りである。両都市とも黒海、日本海という内海に面したロシアの南下の拠点であり、さらに黒海は東地中海世界、日本海は東アジア世界というより大きな海域の一部である。またオデッサではユダヤ人(19世紀はギリシア人も)、ウラジオストクでは中国人や朝鮮人といったディアスポラな存在が貿易に大きな役割を果たした。オスマン帝国、清帝国という東西のアジアを代表する帝国がすぐ近くにあり、第一次世界大戦直前には、バルカンやアナトリアに進出するドイツ、満洲に進出する日本への対抗策が、オデッサとウラジオストクの商工業者間で議論されていた、ということも共通している。

そのうえで本報告が特に着目したのは、以下の類似点である。1つはロシア義勇艦隊である。これは1879年の試験運行を皮切りに、オデッサとウラジオストクをスエズ運河経由で結んだ路線であり、日露戦争後には年25往復ほどしている。活動初期には、オデッサからウラジオストクへ兵士や移民などを運び、日露戦争後(すなわちシベリア鉄道開通後)は、オデッサやノヴォロシースクから砂糖やセメントなどを

運んだ。また途中、中国やセイロンから茶も輸送している。このようにオデッサとウラジオストクは船で結ばれていた。

もう一点は、本報告のメインとなる無関税港制(ポルト・フランコ)と自由港制(ヴォーリナヤ・ガーヴァニ)をめぐる問題である。ここで両制度の違いについて解説しておく、どちらも物資の輸入に際して免税する点では一緒だが、目的や適用範囲が違う。無関税港制は、物資の供給による地域経済の活性化を目的としており、適用範囲がかなり広くなる。ロシア極東の例だと、イルクーツクよりも東はすべて無関税港制の適用範囲だった。一方、自由港制の場合はあくまでもトランジット貿易の促進である。そのため、適用範囲も港の一角というのが原則である。また適用範囲内における活動も、自由港制のほうが大きく規制される。

オデッサは1819~1857年、ウラジオストクは1862~1909年(ただし1901~04年は除く)、無関税港制の恩恵を被っていたことが共通している。しかも第一次世界大戦直前、前述のようにドイツや日本に対抗する必要が生じたとき、オデッサもウラジオストクも商工業者が対抗策として政府に働きかけたのが、自由港制の導入である。

オデッサの、自由港制導入の論拠は以下の通りである。自由港制導入により、オデッサは近東地域の流通のハブへと成長することが見込まれ、さらにそのことはロシアの海運や産業の発展を刺激することが期待できる。現在、ドイツとオーストリア=ハンガリーが鉄道を使ってバルカン、小アジア、ペルシア市場への「経済的侵略」を試みているが、それに対抗するには自由港制をオデッサに導入し、経済の主導権を握ることが有効であると。

もっとも、管見の限りオデッサの陳情には明示されていないが、この当時オデッサが、ニコラエフやロストフ・ナ・ドヌーなど他の黒海沿岸のロシアの港から貿易面で追い上げられていたことも、自由港制導入の動きかけの背景にあると思われる。その一方で独塊への対抗という側面を強調することは、政府を説得するレトリックとして有効だったと考えられる。実際、商工省の反応は好意的であった。

ウラジオストクの場合、満洲大豆のロンドンへの輸出をめぐる大連との競争が、自由港制導入計画の大きな動機

であった。また朝鮮北部との経済関係を強化する必要性も、自由港制導入の論拠として主張されている。いずれも隣接地域との関係強化を目指すものであり、日本の大陸進出への対抗策としての側面があった。満洲大豆の輸出に関連して、当時政府内で検討されていた、ウラジオストクとバルト海を直接結ぶ義勇艦隊の航路創設への期待も表明されている。この航路を使えば、ロシア人自身がロンドンへ直接大豆を運べるからである。

しかしいずれの自由港制も、第一次世界大戦勃発のため帝政期のあいだは実現しなかった。ただし自由港制をめぐる議論を検討することにより、環黒海地域と環日本海地域の類似の状況を明らかにすることができる。だが軍事と経済の関係など考えるべき課題はまだ多く、今後もこの比較研究を進めていきたいと考えている。

報告後の質疑の中では、無関税港制と自由港制の違いについてや、そもそもオデッサが自由港制によって目指したものを「ハブ」と表現するのが正しいのか、当時本当にオデッサは「衰退」していたのか、現在のオデッサやウラジオストクとの比較などが議論された。

(執筆：左近幸村)



5. 学生たちによるサウジアラビア体験報告記

2013年12月、本学学生4人および当センターの辻上奈美江が、東京大学の体験活動プログラムを通じて、サウジアラビアのプリンセス・ヌーラ大学を訪れました。入国が難しいとされるサウジアラビアですが、プリンセス・ヌーラ大学や在京サウジアラビア大使館文化部などのご協力を得て、渡航を実現させることができました。また現地では、本学学生のために特別のアラビア語コースを準備していただき、短期間ながらもアラビア語を集中的に学習する機会を得ました。また、学生たちは大学寮に滞在しながら、現地の学生との交流を楽しみました。

帰国後、参加した学生たちが、今回の体験を綴ってくれました。(辻上奈美江)

キャンパスについて

文学部 3年 金子彩

今回私達は、世界最大規模の国立女子大学であるプリンセス・ヌーラ大学に滞在した。世界最大規模とのことだが、本当にキャンパスの大きさに驚かされた。キャンパス内には、モノレールが走っており、まるで山手線のようにキャンパス内をぐるぐると一周している。モノレールの外周に、我々が今回滞在了寮、教員用のレジデンスエリアがある。寮もとても大きく、寮の建物間の移動もゴルフカートが利用されている程である。

今回は、大学側のご好意でキャンパス内の寮に滞在し、学内で毎日3時間のアラビア語の講義を受けることができた。寮と講義室、同じ敷地内にどちらも隣接しているから移動は簡単だろうと思いきや、9時からの講義に8時すぎには出発する程の遠さなのである。まず、寮を出て、ゴルフカートで駅まで向かう。駅から学内に入り、電車で数駅、講義棟に近い駅に到着する。講義棟まで歩き、広い建物をぐるぐると歩き、やっと到着する。大学内のモノレールは、この大学の有名な特徴の一つであるが、なんと学内に10駅以上もある。乗車中は、キャンパス内の様

子をぐるりと見ることができ、遥か遠くの方には学外の様子も見える。といっても、プリンセス・ヌーラ大学は空港から近く(車で10分程)、学外の景色から近く、ほとんど砂漠の様な景色である。学内のモノレールは本数も多く、路線図もあり、とても快適な移動手段であった。

講義棟内の様子に関して、本大学のすべてを見学することはできなかったが、講義棟内には教室、図書室、実習室、お祈りの部屋、等様々な施設があり、どここの国の大学にも見られる様に、廊下では学生が会話を楽しんでいた。私達が訪問した週は、丁度テスト週間で、生徒は皆試験勉強に励んでいた。建物はとても新しく、雰囲気はアメリカの大学といった風だろうか。学内では、アバヤ(黒い上着)を着ている生徒、着ていない生徒、様々だが、教室内ではアバヤを羽織る程度のラフな格好である。しかし、学内の敷地内とは言っても、建物の外など男性のメンテナンススタッフがの目がありそうな場面ではアバヤを着用していた。学外に一步出れば、アバヤにヒジャーブ、それも目以外は全て隠すスタイルに、皆一瞬で様変わりしていた。

私達が滞在させて頂いた大学寮だが、一人につき一部屋、加えて共同スペース用の一部屋が割り当てられた。寮を監督する係のスーパーバイザーが事前に各部屋を可愛らしく装飾してくれており、本当に快適な寮生活であった。他の学生と同じ様な部屋で、勉強机、棚、ベッド、クローゼット、シャワールーム、洗面、冷蔵庫、と自炊は出来ないが、寮生活には十分な設備であった。昼は、学内のカフェテリア、売店で購入するか、一日に一食無料配布される学食の弁当で済ませる様だった。

学内での自由は、私達よりも格段に狭められているが、キャンパスの寮や講義棟での様々な設備の様子は、どここの国とも変わらない、むしろ国立の女子大学としては世界最大規模の充実ぶりであった。

アラビア語でアラビア語を学んだ一週間

教養学部 1年 茂木文華

授業は一日三時間、合計五日間に渡って行われた。初日はアラビア語での挨拶と自己紹介の練習から始まり、最終日には簡単な形容詞などを使って簡単な会話(初対面同士の人が各々の出身や家族構成を語る程度のことだが)までを習得するカリキュラムであった。

授業を受けて最初に驚いたのは、先生たちが我々にアラビア語でしか話しかけないと決めていたことである。これを知ったとき、一日もしないうちに授業に置いていかれるだろうと不安になった。

しかし、授業が開始されると不安は吹き飛んだ。意思疎通が難しく説明を諦めた先生が英語で指示することも幾度かあったが、五日間でなんとか先生の言わんとしていることを理解することができるようになった。初日は「アッサラームアライコム」以降の会話文が聞き取れなかった私も最終日には家族構成の説明などが聞き取れるようになるまでリスニング力が向上した。それに加え、なんと五日間で文字を全て覚えることもできた。

これほど上達できたのはやはりアラビア語漬けにされたおかげであろう。先生の言うことがとにかく分からないので全員オウム返しで一言一句先生の言葉を真似たが、それが一番功を奏したのではないかな。

帰国後、岩波ホールで公開中の映画「少女は自転車にのって」を鑑賞したが、サウジの方言がとても懐かしく感じられた。プリンセス・ヌーラ大学で学ぶ機会を得て、生きたアラビア語に触れ、その響きの美しさ、流れる文字のしなやかさに感動させられた。今後もこれを糧にアラビア語の学習を続けたい。



ワークショップに参加して

法学部 3年 宮崎梨乃

サウジアラビアにおける今回の研修でもっとも楽しかったことの一つに、プリンセス・ヌーラ大学主催のワークショップがある。ワークショップは2回にわたって行われ、同大学の教員や学生らとともにサウジアラビアの伝統文化を体験した。

第1回目は、伝統織物のパッチワークアートであった。寮の一部屋に集められた我々は、まずその材料の数々に驚いた。大きな机いっぱいに、布、糸、ビーズが色とりどりに並べられている。お題は、1つずつ与えられた木箱を、伝統的な柄がプリントされた布をパッチワークで飾り付けるというものであった。それぞれグルーガンやボンドを使い、色鮮やかな布やビーズを貼り付けていく。創造性を発揮し黙々と作業を進める者もいる中、私はあまりの不器用さゆえに、作業のほとんどをサポート役の学生に手伝ってもらっていた。そんな中うっかり手が滑り、貼り付けたばかりの布が大きくずれた。思わず「うわっ、大丈夫かな?」と日本語で叫ぶと、「I don't know...」と英語で返ってきた。日本語が分かるのと訊くと彼女は何か照れる。なんと日本語を少し理解できるだけでなく、嵐の松本潤のファンだという。その後は日本語と英語、覚えてたのアラビア語をない交ぜに、日本の芸能人の話で盛り上がった。3時間があっという間に過ぎ、それぞれのデコレーションもなんとか完成。サウジアラビアの伝統芸術でつくった、世界に一つだけのジュエリーボックスだ。学生らとの楽しい会話とともに、大切な宝物となった。

第2回目は、デザートとナッツを使ったお菓子作りであった。ここでも、我々はまず部屋に入った瞬間に息を呑んだ。テーブルに飾り付けられた料理、これから作るお菓子の材料、学生達のエプロンに至るまで、目に入るもの全てが可愛く女の子らしいものであふれていたのだ。そしてもちろん、指導役の学生達自身もとても可愛い。圧倒的「女子力」を目にして、よく分からない敗北感の中、お菓子作りは始まった。

デザート(ナツメヤシの実)を使ったお菓子のレシピは至ってシンプル。ペースト状

のデザートに、粉ミルクや溶かしバターを加え、よく練って団子のように丸める。後は好みによって粉末ナッツやチョコレートまぶせば完成だ。しかし最初は指示通り団子状に丸めていた我々も、指導役の学生達と打ち解けるうちに方向性を変え、ここでも創造力を発揮してしまった。星形やハート形に始まり、果てはラクダに至るまで…。だが意外にも、可愛くパワフルな彼女達には大好評だった。その後はまたもや日本のドラマや芸能人の話で盛り上がり、我々は互いに大事な友達となった。

我々はこれらのワークショップを通じて、サウジアラビアの伝統文化を窺い知ることができた。またそれ以上に、プリンセス・ヌーラ大学の学生達とともに楽しい時間を過ごすことができた。彼女達とのやり取りは今も続いており、これからもこの縁を大切にしていきたい。

サウジアラビア人女性との交流

教養学部 2年 葛島早紀

サウジアラビアの女性について、私は真っ黒なブルカで顔を隠し、家の中では夫に尽くすといったややネガティブなイメージを持っていました。

しかしプリンセス・ヌーラ大学で出会った女性にとってはとても元気で明るい、活発な女性ばかりでした。私たちが覚えてたのアラビア語であいさつをする、すぐに打ち解けて話に花が咲きました。彼女たちは本当におしゃべりが大好きで、とても温かい心で私たちを歓迎してくれました。また日本語が堪能な生徒もあり、日本のアニメやドラマは非常に人気が高く、日本へ留学したいという声もたくさん聞きました。

彼女たちは、本当によく褒め、その褒め方もとても上手でした。可愛いらしいもの、例えば幼い子供や、ペット、アクセサリーなどを見ては「ジャミール!(きれい、かわいいなどの意味)」と言い合います。また話し相手である私たちに対しても、「本当に日本は素晴らしい国!」と熱心に日本の良さを語ってくれました。静かで謙虚と言われる私たち日本人は、引率してくださったサウジ人の女性に「全然しゃべらないからどうかしたのかと思った。」と心配されるほどでした。

ところで、サウジアラビアの女性の権利は西洋や日本では極めて低評価です。ですが、私たちと話すときの彼女たちの表情からは、抑圧された女性などという言葉は想像もつきませんでした。生徒たちは元気いっぱい、先生方も自信に満ち、気品のある方ばかりでした。中でも印象に残ったのは、辻上先生の知人のお宅を訪問した時のことです。「西洋よりもサウジアラビアの女性は権利が認められていないと言われるけれど」と私たちが質問すると、こんな答えが返ってきました。「確かに困難もあるけれど、サウジアラビアの女性は家族や男の人に助けてもらえる。けれど、西洋の女性は自分で全てやらなきゃいけないでしょう。どちらが権利があるかと言うと、逆のように私は思う。」

なるほど、と思いました。実際、サウジアラビアの女性たちは、私たちが思っている以上にたくさんの選択肢を持てるようになりつつあるように思います。政府は企業に対して女性の雇用を推奨し、さらに大学の数が増えるにつれ、そこで働く女性が必要とされます。サウジアラビアの女性が外に出て働くということは、常識になりつつあるようでした。例えば、30歳を超えても独身で大学で働いている女性や、将来は医者や薬剤師になりたいという学生ともたくさん出会いました。

しかしながら、まだ彼女たちには困難もあるようです。女性の就職先の数は依然少なく、どれだけの女性が希望の職業につけるかわかりません。ある生徒は「いつか日本で結婚したい!」と元気よく話す一方、「親は、私を一人で海外に出すことをとても心配しているの」と少し淋しそうに言いました。彼女たちの文化や価値観を尊重しつつも、彼女たちの夢が少しでも実現してほしいと願うばかりでした。



6. 書評

末近浩太（著）『イスラーム主義と中東政治：レバノン・ヒズブッラーの抵抗と革命』
名古屋大学出版会、2013年10月刊、単行本、480頁

評者：今井静（日本学術振興会特別研究員 PD / 立命館大学）

本書は、レバノンのシーア派イスラーム主義組織ヒズブッラーの、1982年の結成から現在までの30年間にわたる軌跡とその実態を、国際政治学や比較政治学、社会学や人類学などを援用したディシプリン横断的な地域研究の手法で描き出した研究書である。著者は、現在まで10年以上にわたって同組織についての調査研究の成果を発表してきた日本における研究の第一人者であり、本書には豊富な一次資料と現地調査によるデータをもとにした実証的分析が盛り込まれている。

著者は、本書の冒頭でヒズブッラーという組織の特徴を二つの言葉に集約して提示している。一つ目の「イスラーム主義のフロントランナー」は、イスラエルに対する「抵抗」とイスラーム国家の樹立を目指す「革命」を活動の軸として誕生しながらも、自爆攻撃の「発明」を含む武装闘争とその見直し、合法政党化の選択、国民国家との関係調整といった方策によっていくつもの課題を乗り越えてきたことによる。二つ目の「中東政治の結節点」は、そのような彼らの動向がレバノン政治・中東政治・国際政治のダイナミズムに反映されていることによる。

これらを踏まえて、ヒズブッラー自身が既存の国民国家とディシプリンにおけるそれぞれの境界線を越えるアプローチが必要な存在であるとして、彼らの動向についての分析を通じて①現代世界におけるイスラーム主義のあり方とその役割を論及し、②レバノン政治、中東政治、国際政治の連環を描き出すことが、本書の目的となっている。

本書は、レバノン政治の三つの時代区分に沿った3部構成・全10章からなる。

第1部「国境を越える抵抗と革命—ヒズブッラーの誕生と発展」は、「内戦の時代（1975～1990年）」を対象に、ヒズブッラー結成に至る組織的・思想的基盤とその発展について解き明かしている。第1章では、近年入手可能となった資料をもとに、ヒズブッラーの誕生がトランスナショナルなシーア派ネットワークと1970年代末から

80年代初めにかけての中東政治の変動の産物であったことが指摘される。続く第2章では、1985年に発表され現在までヒズブッラーの綱領として保持されている「公開書簡」の分析をもとに、国境を越える抵抗と革命という彼らの思想の特徴が明かされている。第3章では、内戦下のレバノンが「国家変容」の渦中にあったとしたうえで、それによって地域システムおよび国家システムが動揺し、非国家主体であるヒズブッラーがトランスナショナルなアクターとして成長する契機を掴んだことが指摘される。

第2部「多元社会の中のイスラーム主義—レバノン化するヒズブッラー」は、シリアがレバノンを実効支配する「疑似権威主義の時代（1990～2005年）」において、合法政党化への道を歩んだヒズブッラーの変容とそれがレバノン政治および国際政治にもたらした影響について論じている。「ヒズブッラーのレバノン化」とは政党化という制度化と活動の対象をレバノンに絞った「ローカル化」の双方からなるものであり、この時代のヒズブッラーがとった戦略を端的に表す言葉となっている。

第4章では、第二共和制の成立や中東和平プロセスの開始といったさまざまなレベルでの逆風を受けながらも、ヒズブッラーが「武装政党」という特殊な地位の確立に至った要因が検討され、続く第5章では、民主主義国家におけるイスラーム政党としてのヒズブッラーの政治実践が、選挙への参加を通じて成功を収めていることが明らかとされる。第6章では、内戦中のイスラエルによる南レバノン占領に端を発する紛争に焦点を当て、非対称戦争と代理戦争というこの紛争を特徴づける二つの側面についてヒズブッラーが演じてきた役割とそれによる紛争継続のメカニズムについて論じられる。第7章では、ヒズブッラーが結成以来草の根レベルで展開してきた社会サービスに焦点を当て、それに関わる人々の実態が聞き取り調査などから明らかにされる。

第3部「今日の中東政治の結節点—

—ヒズブッラー化するレバノン」は、「民主化の時代（2005年～）」において、ヒズブッラーがレバノン政治の主要アクターとなり政府を掌握していく過程を描いている。

第8章では、2006年のレバノン戦争がヒズブッラーとイスラエルとの間の「恐怖の均衡」の崩壊プロセスとして説明されるとともに、それが「新しい戦争」としてそれまでの紛争状態と一線を画していることが指摘される。第9章では、杉の木革命以降のレバノンで国内政治の諸アクターが親シリア・反革命勢力と反シリア勢力に二分される中で、ヒズブッラーが前者の代表的勢力として多極型と多数決型という二つの民主主義モデルの採用が生み出すねじれを利用して権力への階段を上っていく様子が明らかにされる。第10章は、ヒズブッラーがアラブの春による国内政治および中東政治の変動、とりわけシリア情勢の混乱にどのように対応しようとしたかを、同組織の「中東政治の結節点」としての側面から論じている。

2011年初めに始まった「アラブの春」以降の中東政治の混乱の中で、イスラーム主義組織は改めて脚光を浴びている。本書の出版はまさに時宜を得たものであり、そこで明かされたヒズブッラーが組織の存続と発展のために合理的に選択してきた戦術の数々は、イスラーム主義組織の多様な実態を示し、「イスラーム原理主義組織」などの用語に込められた頑迷なイメージを否定する格好の事例となっている。とりわけ、第10章で言及されたアラブの春以降のヒズブッラーの動向が「保守としての抵抗と革命」、すなわち自らの存在意義を喪失させるような地域秩序の出現を阻み紛争構造の温存を志向しているという指摘は、イスラーム主義組織が決して現在の中東政治および国際政治における例外的なアクターではなく、他の世俗的な組織と同様に普遍的な組織として分析の対象とされるべきであることを示している。

このように、イスラーム主義組織ヒズブッラーを通して現代政治のダイナミズムを生き生きと写し取っている本書は、同組織が挑んでいる近代国民国家群の機能と限界をも動的に示している。その意味では、本書は中東政治やイスラーム主義に関心をもつひとのみならず、広く現代の国際社会の諸問題に関心を寄せるすべての人々にとって必読の書と言えよう。

7. センターの活動から

●ザイド大学教員のセンター訪問

2013年12月10日火曜日、アラブ首長国連邦（UAE）のザイド大学のリーマ・サッバーン博士（Dr. Rima Sabban）が、センターを訪問しました。またリーマ博士は、UAEの社会情勢などについて講義を行いました。



●スルタン・カブース文化科学高等センター事務局長の東京大学訪問

2013年12月12日木曜日、スルタン・カブース文化科学高等センターのハビーブ・リヤミー事務局長（H.E. Habib al-Riyami）一行が、本学を訪問しました。事務局長一行は、長谷川寿一本学理事・副学長および石井洋二郎総合文化研究科長を表敬訪問したほか、UTCMESスタッフと、2014年10月開催予定の、スルタン・カブース講座国際シンポジウムの準備状況などについて、打ち合わせをしました。



（石井洋二郎総合文化研究科長（左から二人目）とオマーン側訪問団）



（左からムスラヒ駐日本オマーン大使、リヤミー事務局長、長谷川理事・副学長）

● UTCMES スタッフ紹介 (2014年3月31日現在)

<スタッフ>

杉田 英明 (センター長、兼務教授)
森元 誠二 (客員教授)
辻上奈美江 (特任准教授)
瀬口 美加 (事務補佐員)

長澤 榮治 (副センター長、兼務教授)
高橋 英海 (兼務准教授)
近藤 洋平 (特任助教)

< UTCMES 運営委員 >

杉田 英明 (委員長、大学院総合文化研究科教授)
伊藤たかね (大学院総合文化研究科教授)
矢口 祐人 (大学院総合文化研究科准教授)

長澤 榮治 (東洋文化研究所教授)
大稔 哲也 (大学院人文社会系研究科准教授)
高橋 英海 (大学院総合文化研究科准教授)

<スルタン・カブス・グローバル中東研究寄付講座運営委員>

杉田 英明 (委員長)
松尾 基之 (大学院総合文化研究科教授)
高橋 英海

遠藤 泰生 (大学院総合文化研究科教授、グローバル地域研究機構長)
矢口 祐人

● 発行者情報 UTCMESニューズレターVol.5 平成26年3月31日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター (スルタン・カブス・グローバル中東研究寄付講座)
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL 03-5465-7724 FAX 03-5454-6441
<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/index.html>

印刷：JTB印刷株式会社

〒171-0031 東京都豊島区目白2-1-1 TEL 03-5950-2731 FAX 03-5979-7022